

仏教企画通信

第82号

発行日 令和8年1月1日
発行所 有限会社 仏教企画
〒252-0016
神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel: 042-703-8641 / Fax: 042-782-5117
発行人 藤木隆宣
編集人 山河宗太 (OFFICE-SANGA)
Email fujiki@water.ocn.ne.jp

●2500年の歲月●

仏教とは何か。この質問にこたえることは、簡単ではありません。もちろん、仏教は開祖となったゴータマ・ブッダ（釈迦牟尼仏）が説いたものですが、仏教とはゴータマ・ブッダの教えである、ということはまちがいありません。

ただし、仏教には2500年にも及ぶ歴史があります。これほどの歴史があれば、その間に、さまざまな変化が生じたことは、誰でも想像できます。

古代インドで生まれた仏教はその後、南アジア、東南アジア、東アジア、北アジア、中央アジアにまで広がりました。自然環境はまさにさまざまです。気候は、酷暑の熱帯から、比較的過ごしやすく四季がある温帯を挟んで、寒冷な亜寒帯に及びます。地理は、緑豊かな大平原もあれば、一木一草も見当たらない砂漠もあり、果てしない海原に浮かぶ島嶼もあれば、チベットのよう平均高度が4000メートルという広大な高原もありました。経済生活

は、豊かな地域もあれば、貧困からなかなか抜け出せない地域もありました。そこに居住する民族も多種多様なら、国も政治体制も多種多様でした。そして、各地に、仏教が伝えられる前からいろいろな宗教があり、新来の仏教とのあいだに、拒否、受容、融合など、複雑な関係が生じました。

ちなみに、2500年前というと、日本では縄文時代の末期から弥生時代の初期に相当します。稲作が大陸からもたらされ、広がり始めていた時期です。縄文時代の末期から弥生時代の初期と、現代の日本とは、自然環境も社会構造も大きく変わっています。なにしろ、縄文／弥生↓古墳↓飛鳥↓奈良↓平安↓鎌倉↓（南北朝）↓室町↓戦国↓江戸↓明治↓大正↓昭和↓平成↓令和と、時代が変転してきているのですから、当然です。

また、仏教が日本に伝来したのは6世紀の前半期です。そこから数えても1500年が経過しています。仏教に対する日本人の思いや期待も、あ

るいは信仰のあり方も、大きく変わっていて不思議ではありません。

したがって、仏教とはゴータマ・ブッダの教えである、ということはまちがいありませんが、その教えに対する解釈は、歴史と地域によって、大きく変化していったのです。というよりも、大きく変化せざるを得なかったのです。

そもそも、ゴータマ・ブッダは対機説法、すなわち相手の資質や境遇を考慮して説法する名手でした。しかも、発した言葉はすこぶる簡潔でしたので、いろいろな解釈が生まれる余地は、最初からあったようです。そして、解釈が大きく変化したからこそ、いや大きく変化できたからこそ、仏教はこんにちまで、わたしたちにとって最も大切な精神的な糧として、生き続けているのです。

●ゴータマ・ブッダから 佐々木宏幹へ●

わたしはこのような変化を肯定的に受けとめたいと思っています。

こう言うと、本当の仏教はゴータマ・ブッダが在世していたときに説かれた教えや修行法だけで、その後に登場した教えや修行法はすべて本当の仏教ではない、と考える方がいるかもしれません。しかしながら、そういう考え方は偏狭すぎます。下手をすると、原理主義の罠におちいる可能性があります。歴史の貴重な教訓として、状況に応じて変化できないものは、人々から置き去りにされ、滅び去るしかないのです。それは仏教についても、言えることです。

もちろん、仏教を名乗る教えがすべて本当の仏教とは言

えません。偽物がたくさんあります。

ちよつと見には本当の仏教らしく見えても、よく観察してみると、とんでもない教えだったりします。ですから、慎重に見分けなければなりません。その反対に、ちよつと見にはゴータマ・ブッダの教えと違いがあるように見えて、実は仏教の本質を見事に備えている例もあります。

たとえば、佐々木宏幹先生が提唱された「生活仏教」が、それにあたります。「生活

正木 晃

仏教とは何か 第一回

ゴータマ・ブッダと佐々木先生の教えには、その根幹において共通する要素が、それも最も重要な要素が、いくつも発見できるからです。例を挙げると、

「生活仏教」は、最初期の原始仏典に説かれているゴータマ・ブッダの教えと、かなり異なっているように見えるからです。最近の研究によれば、ゴータマ・ブッダは出家者だけを、それも「説教を聞いて理解できる者」だけを対象に教えを説いていて、俗人は対象外でした。それに対し、佐々木先生の「生活仏教」は、現に生活している人々すべてを対象にして説かれています。ですから、その違いはきわめて大きいと考えられがちです。

●とても柔軟な仏教●
もともと仏教は、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教などに比べると、とても柔軟な宗教です。融通無碍とも変幻自在とも言

宗教観、人間観、世界観、生命観、修行観などです。つまり、佐々木先生は、2500年前に説かれたゴータマ・ブッダの教えの真髄を、日本の歴史や地域性を十二分に考慮した上で、2500年後に生きているわたしたちに向けて、展開しようとしてめられたのです。ということは、最初期の原始仏典に説かれているゴータマ・ブッダの教えが本当の仏教であるならば、2500年後に提唱された佐々木宏幹先生の「生活仏教」もまた本当の仏教なのです。



私は坐禅会を50年以上継続してきたからといって、別に生粋の坐禅人というわけではない。澤木興道老師から大きな影響を受けたからとて、特に老師に長く、あるいは身近に参禅していたわけではない。

またま事情があつて、一般大学から駒澤大学仏教学部へと転校し、最初の「禅学実習」の時間に澤木老師の向かい単に坐るという好縁から、一年だけ単の真後ろから大声で提撕を受けただけであるから、同様な方は世間に大勢おられたので、私だけが特別な感化を与えられたわけではない。

それどころか、初めのうちは、これはエライことになったぞという、嫌悪感のほうが強い等のバチ当たりであった。それがいつしか尊崇敬恭に変つたのは、老師の徳望の何物でもない

のだ。のちに自坊で参禅会（我が寺では作務や他の行事も多いので、初めから「坐禅会」とは呼称しない）が50年以上も続いたのは、二に会員たちの熱意に絆されて継続できたのと同じ道理である。

私は大学院―宗学研究所在籍している間にさまざまな接心や参禅の機会があり、その後には駒大で「宗教学」なる科目を担当させられるや、全ゆる学部（昭和40年当時は仏教学部の他に文学部・法学部・経済学部だけであつたかに宗教・仏教・禅・曹洞禅を修学させ、最後の曹洞禅では坐禅を実習させることになっていた。それぐらいはミッションスクールの特徴であり、当然ではあるが、学生も教師も正直負担ではあつた。

教師の中には自分でテキストを作る者もいたが、後には負担削減を嫌つて徐々に改正され、遂に坐禅は4年間に1回だけ

となつた。ともあれ、私が集団に坐禅を教えたのは、この大学での教科が嚆矢であつた。私はテキストなど作らず、下手くそながら、自分がそれまでに学んできたことを、自分なりに消化して、比較的大きな声で学生には対処してきたつもりである。

会員の方々と歩んだ坐禅の道

駒大の坐禅堂は、禅研究館の4階にある。かなり広く、10間四方ぐらいの本格的な造りである、正面入口の右側（外単の上間の最上部）には、澤木老師の彫像が生けるが如く結跏趺坐をしておられる。知らぬ学生から、これは誰かと何度か聞かれ、「これはな、澤木興道老師というお方の肖像で、日本の内外を通じてこの方の影響を受けた者はどれほどあるか分かんのだ。（君達から色気と食気を抜いて残るものがあるか？ あればそれだけ君達の本モノだ。それを見出して使いまくるのが禅だ）のよう、に、ズバリと教えて下さった方だ」と、何度も答えた。私の禅の基本はこんな程度であり、恥ずかしながら老師からの受け売りが多い。自坊の参禅会での口宣でも提唱でも、いうなればそんな延長に過ぎない。

ただし、どんな立派な方の影響を受けようとも、宗門の住職である限りは檀信徒に何らかの呼び掛けがなくてはならない。蒔かぬ種子は生えぬ、

のである。私は大学院生の頃から、細々とながら種まきをしてきた。相手は院生となる為金策でそここちの子供らを相手に行つた家庭教師の教え子が多く、寺の近くの檀家の子供や、縁者たよりに柏町（当時は町）の子供達、その他であつた。中には東京都内の子も1、2名いた。旅費が掛かるが、報酬も良かった。夏休みには全員を集めて特別研修の名で数泊の坐禅会をしたこともある。

また、都立の某高校生書道部の合宿も、2、3回夏休みに行い、坐禅と読経（般若心経）を行修した。地元の大学生などのインテリ青年たちが集まる会もあり、坐禅を時々行つた。

話を聞いて小泉さんという檀家の歌人が坐禅にはまり、2年間ほど毎晩単独で坐禅に來山された。この方は窪田空穂―館山二子―小泉氏と連なる錚々たる歌人だったが、惜しくも40代初めに急逝された。でもその歌集には私が序文を書いた。その他、町（沼南町）の教育委員会が聞き知って、1度は坐禅会を公費で開催してくれた事もあつた。

また、柏市のボーイスカウト、海上自衛隊下総基地の隊員達、柏市商工会青年部などにより随時に坐禅会が行われ、私が指導した。こうした不定期で自由な形の坐禅が、毎週第4日曜午前9時からという定期実施の開始は昭和46年7月25日（日）からであり、第1回はガ

り版印刷の案内を30通ほど出し、8名の参加であつた。会の次第は、坐禅―経行―坐禅―講義―座談で、原則として50年間以上不変であつた。

講義テキストは、普勧坐禅儀―正法眼蔵随聞記―瑩山禪師法語―智首座に与ふる法語―覚阿上人に与ふる法語などの比較的阅读易いものを8年かけて読み、54年正月からは『正法眼蔵』を拝読し、これは約半分ほどを唱導した。何せモノがモノであり、また私の専門研究テーマが中国禅の文献史であつたから、これは止むを得ない。

定期的な参禅会の体制になつても、來山実施者の数には増減が続いた。また、当山の伽藍の新改築にも、左右されることがあつた。また、坐禅は世間一般の流行退廃に左右されることもあつた。だから人数は当然不定である。だが、新本堂が完成後の昭和50年代の末頃からは常に20名から30名の参加者となり、しかも永く続く人（常連）が増加する傾向となつた。

会員名簿や同士の名を覚える為の記章付けなどは比較的早くから行われたが、やがて発会後15年目の昭和60年から、会の会報が発刊される事となつた。題名の「明珠」は私の命名で、『正法眼蔵』一顯明珠の巻から採用した。その創刊号には、この題名の由来を不肖ながら巻頭に謳つた。以後、4月8日の仏誕会と10月5日の達摩忌には、必ずこの会

報を刊行し、現在は第82号を数える。

会報「明珠」の最終頁には、「龍泉院参禅会簡介」として、参禅会の日時・差定が細かく紹介され、次いで自由参禅の紹介、年間行事・成道会・他の諸行事・作務・ウェブサイトなどが簡潔に紹介されている。その中で目を惹くのは、「自由参禅」。これは月の第1日曜と第2土曜で、自由な時間に単に上つて坐るか、又は椅子坐禅のどれでもよい。現在はこの自由参禅が受けているようで、ここから入つて常連となる人が多い。また、他の諸行事の中では施食会（8月16日）が特殊で、昭和期頃までは大昔の五人組のように、土地の家10戸が順に当番となつて役員や來客の接待や本堂内の飾り付けなど一切を行つていたが、他宗派の家などで拒否する人が出てきてから、すべて参禅会に一任するようになった。

また、特に成道会をだしているが、これはこの寺は昭和末期ごろに拙妻の努力によって最盛期には寺で講習会などを時々行い、また県の大会や全国大会にも参加し、龍泉院講の名を高めた。梅花では成道会も重んじることから、例年12月に行じていたが、そこに参禅会が加わるようになり、いつしか主客転倒するようになった。参禅会では、こうした宗門的な行事の場合、導師以外の諸配役はすべて会員が行い、住職

坐禅というもののへ序曲

曹洞宗は坐禅宗といえるか

千葉県柏市 龍泉院東堂
椎名宏雄



えます。その証拠を、以下に述べます。

ゴータマ・ブッダは、そのころ北インドで広く使われていたマガダ語で教えを説いていましたが、正確に伝えられるのであれば、何語で教えを伝えても全然かまわないと弟子たちにさとしていました。そのため、ゴータマ・ブッダの教えは、ごく早い時期から、パリー語、ガンダーラ語、サンスクリット（梵語）からはじまつて、チベット語、中国語（漢文）、モンゴル語など、多種多様の言葉で伝えられ、そのどれもがゴータマ・ブッダの教えとみなされたのです。

しかし、世界の宗教史を見渡すと、このような発想はまっ

ア語に翻訳されました。次いで、ヨーロッパに広がる過程で、（旧約）聖書も新約聖書も、古代ローマ帝国の言葉だったラテン語に翻訳されました。イスラム教の聖典コーランは、開祖のムハンマドが使つていたアラビア語で書かれています。

ここから先が問題です。キリスト教では、宗教改革を主導したマルチン・ルターが、16世紀の前半期に、母国語のドイツ語に翻訳するまで、ラテン語で書かれたものしか正統とみなされませんでした。イスラム教では、今なおアラビア語で書かれたもののしか正統とみなされず、他の言葉に翻訳されたものは注釈書扱いです。

●読まれては困る？

ラテン語もアラビア語も、習得するのはとても難しいことで有名です。ラテン語やアラビア語を母国語としない人々にすれば、文字とおりちゃんぶんかんぶんです。ラテン語やアラビア語を習得できた、ごく一部の入々しか、聖典を読めないことになり、大部分の人々は、聖典に何がどう説かれているか、知るよしもないのです。

そうなる、ラテン語やアラビア語を習得できた、ごく一部の入々が絶大な権威を獲得し、大部分の人々の上に君臨して、有無を言わせず、従わせることになりかねません。現に、そういう事態がよく起こりました。いや、今なお、起こっています。

逆にいうと、宗教的な権威をずつとともちたい人々にすれば、聖典を誰もが読めるようになつては困るのです。この点は、前述のマルチン・ルターが母国語のドイツ語に翻訳したために、それ以前とは比べものにならないほど多くの入々が、キリスト教の聖典を読めるようになり、その結果、ヨーロッパの宗教界に長らく君臨してきたローマ・カトリック教会の権威が急速に失われていった事実を見れば、誰でも納得できます。

要するに、セム型二神教と一括されるユダヤ教・キリスト教・イスラム教が硬質な宗教なのに比べ、仏教は柔軟な宗教と言えるのです。この点は、セム型二神



教が正統と異端を厳しく分け、ひとたび異端と認定されると、徹底的に排除する歴史を繰り返してきたのに比べ、仏教は正統と異端を厳しく分けようとせず、仮に異端と認定されても徹底的に排除されることがほとんどなかった歴史と、無関係ではありません。

●仮名法語の意味

日本では平安時代の終わりころから、中国を経由して漢文体で伝えられた仏教の教えを、仮名文字でやさしく説くことが始まりました。これが「仮名法語」です。実は、このようなことは、広い仏教圏のなかで日本仏教でしか起こりませんでした。聖典をパリー語で

伝承してきたテラワダ仏教（上座部仏教）でも、同じくチベット語で伝承してきたチベット仏教でも、起こらなかったのです。それを考えると、日本仏教こそ、ゴータマ・ブッダの何語で教えを伝えても全然かまわないという思いを、もっとも忠実に受け継いでいたのかもしれない。

その背景には、日本では古代から仮名文字が使われてきた歴史があります。しかし、それだけが理由ではありません。日本の仏教者のなかに、仏教を僧侶だけが独占するのではなく、一般の人々にも教えよう伝えようという強い意思をもった者たちがあらわれたからです。これは、見方によっては、仏教の「日本化」の典型例とも言えます。仏教を、わかりやすい自分たちの言葉で受けとり、そして理解するというのは、とても幸せなことです。

現在でも、テラワダ仏教圏やチベット仏教圏を訪れると、僧侶と一般の人々のあいだには、乗り越えがたい大きな壁が立ちはだかつている事実に気付かれます。日本仏教の場合は、僧侶が僧侶らしくなく、一般の人々と見分けがつかないという批判がありま



す。わたしのチベット仏教の師であるツルティム・ケサン先生（大谷大学名誉教授）もよくそうおっしゃいますし、たしかにそれは否定できないのですが、僧侶と一般の人々が近いというのも、全面的に悪いとも言い切れないと思います。

さて、次回からは、現存する最古の仏教聖典とされる『スッタニパータ』の、その中でもっとも成立が早いとされる第四章を読み解きながら、「仏教とは何か」を考えていきます。

正木晃（まさき・あきら）
1953年、神奈川県小田原市生れ。筑波大学大学院博士課程満期退学。専門は宗教学（日本仏教・チベット仏教）。文献研究にとどまらず、チベットをはじめ各地に現地調査を実施し、仏典の現代語訳にも務める。また伝統文化を現代社会に再生し、現実の課題にこたえる活動を展開する。著書に『密教』『チベット密教』『チベット史』『空論』『二ほとけ』『マンドラ』など。『現代の修験道』『現代日本語訳 空海の秘蔵宝鑑』『現代日本語訳 法華経』『現代日本語訳 浄土三部経』などがある。



河合隼雄先生(文化庁長官・臨床心理学)との対談「宗教的想像性を考える」
(曹洞禅グラフ2005年お盆93号より)

謹んで本書を 佐々木宏幹先生に捧ぐ 執筆者一同 合掌

2026年2月刊行 島蘭進・佐藤憲昭・高見寛孝編

民俗宗教と仏教文化 佐々木宏幹先生追悼論文集

発行: 仏教企画

本書は、先生の最晩年の編著『宗教人類学の地平』及び
著書『仏教人類学の諸相』と並んで3部作を成すものです。



仏教文化の中核は僧堂である。彼(彼女)ら研鑽を怠らない。
先生の講演会の1コマ。



『「空」は『靈』に支えられている』という論文もある佐々木宏幹先生は、
その「靈」の旧字の意味を解説されている講演会の1コマ。

私たちが敬慕してやまぬ佐々木宏幹先生は、生前、90歳を過ぎてなお健筆をと揮っておられました。そうした先生に、私たちは『民俗宗教と仏教文化－佐々木宏幹先生追悼論文集－』を刊行し、献呈させていただこうと計画しておりました。

その計画を先生に申し上げると、「迷惑をかけるので」とお断りになりました。冷却期間を経て、令和6年2月20日、私たちは再び先生にご許可をいただくための打ち合わせをいたしました。その6日後に先生はご遷化されたのです。

そこで、先生のご命日である、令和8年2月26日の3回忌に『民俗宗教と仏教文化－佐々木宏幹先生追悼論文集－』を捧げさせていただきたく、タイトルや構成内容などを含めて再考し、改めて企画いたしました。そして、先生との縁浅からざる方々と、佐々木先生の学問を継承してゆく次世代の研究者若干名の方々に、ご執筆のご依頼をいたしました。その結果、佐々木先生の学問を継承・展開される20名の方々の論考と、先生のお人柄を伝える16名の方々の追悼文をいただくことができました。

民俗宗教と仏教文化 佐々木宏幹先生追悼論文集

宏幹忌……………山折哲雄

第一部 論文

- 教祖とシャーマン・霊能祈祷師の交錯領域……………井上順考
- シャーマニズム研究と心霊研究……………津城寛文
- 〔術〕〔方法〕としての宗教……………渡邊欣雄
- 中国のシャーマン……………佐々木伸一
- 佐々木宏幹博士のシャーマニズム論(続)……………佐藤憲昭
- 巫者と神楽……………鈴木正景
- 佐々木王権論の行方……………高見寛孝
- 関東における稲荷信仰の諸相……………谷口貢
- 冷たい海と温かい海……………畑恵里子
- 沖縄県名護市字汀間の墓と葬法……………加藤正春
- 朝鮮王朝期に刊行された『持経霊験伝』について……………川上新二
- チベットの化身ラマ信仰と民族宗教……………別所裕介
- いのちの痛みに関わる仏教の新たな様態……………島蘭進
- 靈魂論の行方島蘭……………正木晃
- 「題目講」の活動にみる祈祷と供養―今後の考察への手控え……………長谷部八郎
- 登山と禅……………椎名広雄
- 生活仏教論の可能性……………村上晶
- 「仏力」のちから……………加藤之晴
- 湯けむりに響く仏力と地層……………横井教章
- お坊さんの「有り難さ」は、どこから……………池上良正

第二部 追悼文

- 佐々木宏幹先生を偲ぶ……………洗健
- 佐々木宏幹先生を偲んで……………飯野貞雄
- 佐々木宏幹先生と……………石井修道
- しらとり台の縁……………及川宏幸
- 先生と故郷気仙沼……………大友泰司
- 私の「姿」を追って来なさい……………小川順敬
- ものまねの効用……………加藤順子
- 佐々木先生の思い出……………佐藤亜美
- 佐々木宏幹先生の思い出……………佐藤俊晃
- 「狐憑の符」のこと……………篠原鋭一
- 「菊と刀」と「軍歌バー」……………千葉徹心
- 佐々木先生から頂いたご縁……………永井政之
- 追憶……………中村瑞峰
- ご縁に感謝して……………丸山劫外
- 佐々木先生に励まされ……………山岡隆晃
- 先生との思い出……………藤木隆宣
- 第三部 佐々木宏幹先生の略歴・著作目録・レジュメのタイトル……………あとがき

は導師の他に「一対一」の問答を受け、宗門の昔の偉人たちを紹介したり、会員を20年間努めた人には「全機現」「非思量」などと大書し額装した賛額を贈った。これを受けた方は、今や20名を越える。

参禅会の動向はこんなものではない。初めの頃は例会では満足せず、他山へ赴き刺激や別講を受けたという多数の要望から、1泊で訪問した名利は、大雄山・可睡斎・常真寺・華葉山・總持寺・大雄寺・大乘寺・宝慶寺などで、往復貸し切りのバスで、帰路にはサロンとして、結構賑やかにしたものだ。ふだん真面目で堅物の人には、何らかの息抜きが却って必要なのである。これは息抜きではないが、4月の例会には必ず「タケノコ掘り」の日を作り、当山では毎年何千本も生えて処理に困るのを理由にタケノコを掘ってもらい、かえって助かった。

またこの会は旅行を頻繁に行っている。前記の他山坐禅とは別に、道元禅師の遺跡を訪れる会、良寛さんの遺跡旅行、東北大震災の慰問の旅などである。ただ現地を参観するのではなく、住職の私は必ず関連した語録・法語・詩歌などの講説をさせられ、我と我身の研修もさせられたが、いずれも楽しく有意義な追憶となっている。参観先と関係ある会員はまた、必ずパイロットの役をはじめなんらかのお役を務め、互いに行事の盛り上がりを図った。

旅行は遂には海外にまで及び、中国の禅蹟を参観すること3度、「龍泉院中国参観団」の三角幢は今に残る。最も遠くは、昔玄奘三蔵が登った説法をしたというタクラマカン砂漠の高昌国や、敦煌の北方に13世紀の壁画を留める榆林窟にまで及ぶ。

こうした多岐多彩な活動を踏まえた上に立って、驚くべし、県下唯一の本格的な坐禅堂の建立に突入したのである。

そのおおよその経緯は、前回の「貧寺で20棟も建立できた謎」の中で書いた通りであり、また、拙著『続沼南の宗教文化史』(2024年1月、たけしま出版)にも梗概は書いたので、そちらに譲り、坐禅関係だけに絞ると、この建立に労苦した方々は、その後の行動に目の色が変わった。また、参禅会は10年毎に「在家授戒」を行い、受戒者は安名・絡子・血脈を授受されるが、授受者は全ての活動・行動が本モノになってきている事だけは断言できる。これがわが参禅会における最大最高の功德である。

寺院は何らかの行事を行えば、必ず多くの経費が必要である。しかし、「法輪転ずる所、食輪転ず」(『仏遺教経趣意』)であり、寺が善行のために経費を惜しまなければ、それは変わった形でいつしか還元される。私は従来、「禅をきく会」5回、「在家授戒会」5回を行って、必ず応援者が出たり、違う形で還元がなされ、有り難さを痛感した。ただ1度、会の共済で寺報展を開催した事があるが、警報機の設置や種々の手段を考えた末、結局専門家に夜の巡回を依頼し、3日間で30数万円の出費となった。これが後に宝蔵を作った遠因でもある。

以上、当山の参禅会の動向について縷々綴ってきたが、これは私の寺のように貧しい農村寺院住職であり、にもかかわらずいくつもの業務を持っている者であっても、自分が曹洞宗門に属する端くれであり、坐禅が最も重要な実践だという観

念さえて持っていれば、誰でもできる事をご理解いただきたかっただけである。従来すばらしい行事ができたのは、会員にすばらしい方々がいて、私を叱咤激励し、軌道修正して下さったからである。その意味で、会員さん方は私の先生であり恩師である。正に会員が私を育成し陶冶させて下さったのである。私は決して道念家でもなければ、インドで億単位で不可触賤民を仏教徒に改宗させた、あの火の玉のような情熱の持主、佐々木秀嶺師の万分の一の情熱の持ち合わせもない。ただ、澤木老師などに教わり学んだ

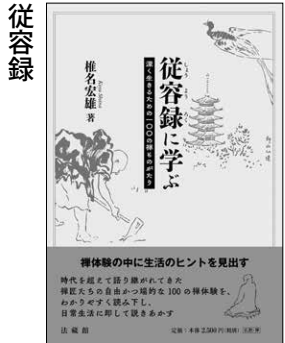
念さえて持っていれば、誰でもできる事をご理解いただきたかっただけである。従来すばらしい行事ができたのは、会員にすばらしい方々がいて、私を叱咤激励し、軌道修正して下さったからである。その意味で、会員さん方は私の先生であり恩師である。正に会員が私を育成し陶冶させて下さったのである。私は決して道念家でもなければ、インドで億単位で不可触賤民を仏教徒に改宗させた、あの火の玉のような情熱の持主、佐々木秀嶺師の万分の一の情熱の持ち合わせもない。ただ、澤木老師などに教わり学んだ



坐禅を当たり前に行ってきたに過ぎないのだ。

私は足が細身であるから、60歳位までは手を使わずに結跏趺坐が楽に組めた。学生に教える時、これをして見せると、「先生、神業だね」といわれた。それほど現代っ子は畳の上の生活をしていないから、坐禅には縁が遠くなっているのだ。しかし、逆に海外からの来邦者で日本文化を何とか身につけようとする人たちは、立派な結跏を組む。だからこそ、僧堂安居を経験した宗侶は、自分立派な日本文化をひとつ持っているのだ、という自信を抱いたらどうか。その上、書道・茶道・剣道・柔道・墨画・尺八と、我々の先覚者・先輩者は、あり余るほどの文化・武道を伝来してくれている。今、私は脳梗塞と大怪我でオランウータンほども歩行が叶わぬ車椅子生活ながら、残された五根を必死に使ってこれを書いている。宗侶方の目に止まり、何らかのお役に立てれば、こんな嬉しいことはない。

「一切に願うことは必ずとぐるなり」と道元さまは教えられた。宗侶のみならず、坐禅の普及を切に切に願おうではないか。



從容録の中に生活のヒントを見出す
時代を超えて語り継がれてきた
禅の智慧を現代の生活に活かす
お坊さんや僧侶だけでなく、
すべての人にとっての良書
目次・索引に詳しく載せてある

從容録
―深く生きるための
一〇〇の禅ものがたり―
著者：椎名宏雄
発行：法蔵館
定価：2750円(税別)

時代を超えて語り継がれてきた
禅の智慧を現代の生活に活かす
お坊さんや僧侶だけでなく、
すべての人にとっての良書
目次・索引に詳しく載せてある

椎名宏雄(しいなこうゆう)
龍泉院(千葉県柏市)前任住職。
駒澤大学大学院博士課程満期退学後、曹洞宗宗学研究所研究員、曹洞宗文化財調査委員、柏市文化財保護委員会会長、駒澤大学大学院非常勤講師等を兼務しながら一九五八年より龍泉院住職。「宋元版禅籍の研究」(大東出版社)、「やさしく読む参同契・宝鏡三昧」(大法輪閣)、「沼南町の宗教文化誌」(たけしま出版)など著書・共著ともに多数。

対談

仏門、変化へのチャレンジ

島津清彦×森香有

国内には7万数千以上の寺院があるといわれているが、時代の移り変わりとともに、その存在意義というものが考える必要があるのかもしれない。この問題は宗派を問わず、曹洞宗でも他人事ではない。

今回、仏教企画では、株式会社シマーズ代表取締役でありながら曹洞宗にて出家得度された島津清彦氏（現在は在家）と、曹洞宗の瑞應寺専門僧堂で役寮をしつつ2児の母でもある森香有氏をお招きし、仏教企画の藤木の感じている問題点とこれからの寺の在り方について、それぞれの考え方をお伺いした。

仏教企画・藤木（以後、藤木）
最近、宗教消滅危機という言葉を耳にするようになりました。これは少子高齢化による檀家の減少や家族観、コロナ禍で顕著になった弔いの仕方の変化。あるいは寺院組織の機能不全などが大きなものかと思っています。それどころか新興宗教においても高齢化が進み、この国における伝統宗教だけでなく新宗教も同じような危機的な状況が顕著となっています。この背景には、日本人の精神構造が大きく変わってきているということがあると思います。つまり価値観の変化に通じるところがあるのではないかと感じます。利益中心主義を中心に、勝ち馬に乗れ

たらいい、ということになっている点。こうした変化において、問われているのは人間力の低下なのではないか、と感じるのです。それゆえ今、仏教の力というものが問われているのだと思います。今の時代だからこそ、仏教の役割をきちんと整理し、新たな考え方を融合させながら道というものを指し示していかなければならないのではないかと。いわゆる創生していく、ということも考えなければいけないと私は感じているのですが、お2人から見て、今の状況をどのように考えられていますか？

島津清彦氏（以後、島津）
14年前、勤めていた会社を辞め

る直前にお伊勢参りを経験したんです。それから毎年欠かさずお伊勢参りをしているのですが、今思えば、そこから流れが変わり退職・起業していきから、そのときに何か使命を授かったのかな、と感じています。今年に入り、今度はたまたま淡路島にご縁があって、日本神話で「国うみの島」といわるこの島で禪リトリートを企画してみたいと思ったんです。鳴門の渦潮を見たときに、この渦に伊邪那岐・伊邪那美のかき混ぜる姿が重なり、ああ、日本の島々はここから始まったのかと胸が熱くなりました。その渦潮がまた、今の混沌とした世の中を象徴しているように見えて、藤木さんのおっしゃる

「創生」の必要性を私自身も今、まさに感じています。
森香有氏（以後、森）
偶然ですね、実は私も先月、淡路島で坐禅をしたい人の集えるリトリートができなかったかと思っ下見に行ったらびっくりなんです。あの島からは何は不思議なエネルギーという力を感じました。私は一昨年までアメリカのサンフランシスコにおり、世界中に広まっている曹洞禅をサポートするお役目をいただいておりますが、今、日本の「禅」も今一度本質に立ち戻り「再創生」されていくような流れを感じています。まずは日本から、そしてまた世界にと、まさに地球そのものを変えていく力のようなものを感覚的に感じています。

藤木 私曹洞宗の僧侶として、住職地では寺子屋的なことをしたり、子ども食堂をしたり、ご相談に乗ったことと自分のできる活動をしているのですが、仏教が生活に浸透していないということにおいては、今の日本人のライフスタイルにも起因しているのかもしれないですね。たとえば身内が亡くなったときの大都会で暮らす方と地方に住まわれている方の違い。大都会はそれこそたくさんの中から葬儀社を選んで弔うわけですが、地方であれば、この集落ではこのお寺、というように生活の一部としてそこにお寺があるわけです。ただ、それも過疎化や少子化が進み、首都圏での生活が当たり前になることが進めば進むほど、それまで生活の一部として存在していた

寺というものが遠い宗教施設になっていってしまう。つまり宗教的な意識の低下につながっているのではないかと、思っています。これまではコミュニティのなかにあった寺からの教えであったり情報発信であったり、そうしたものが失われつつある、ということなのかもしれません。同時に家族構成も関連しているのではないのでしょうか。どの家庭でも避けて通れない世代交代ですが、以前は3世代同居というのが日本人の姿でした。ところが核家族化が進んでいる現代では、葬儀を終えたあとに仏壇をどうするか、というような話になることが多々あります。故人とのつながりはあっても、その息子さんや娘さんとの距離が遠くなってきたこともあり、世代が変わるたびにこの距離感は開くんですよ。

島津 そういえば、マンションなどのチラシの間取り図を見ても、仏壇を置くスペースって確保されていないですよ。祖先様の手を合わせる場所がない。この問題には、本来であれば大きな危機感を持たなければならぬ場面だと思えます。そして位牌を置き、手を合わせるということの意味を、僧侶がちゃんと教える必要があるのではないかと、とも思っています。行事をこなすだけとなり、本来の意味や目的を伝えなければ、やがて仏教自体の消失につながってしまうのではないかと

と感じています。これは企業でも同じで、創業の想いとか、会社のミッションやパーパスといった使命や目的を忘れてしまった儲かる仕組みだけをただこなしている会社もたくさんあります。葬儀が終わって位牌を渡されて、というのが流れ作業のようになっていたとしたら、その流れのなかに身を置いてしまうと、だんだん本来の仏教の大切さや今の時代に合わせた創意工夫すらなされない、というふうになってしまします。大人のそうした姿を見た子どもたちは、彼らは賢いですから、それって本当に必要なことなの？ という感覚になってしまします。昔のようにインターネットや携帯がない時代は人とのつながりが強く、寺という物自体、存在感があり、頼りにされていたのだと思います。ところが今は、検索すればそこに答えがあって、人とはSNSを通じて簡単に繋がれるし、切ろうと思えばすぐ切れることもできる。今のお寺もネット社会の渦に飲み込まれ、簡単に切られてしまふのではないかと危惧しています。まだ年配の方々がご存命の間はいいかもしれませんが、しかし、世代が変わってくるこれからは、寺や僧侶自身の創意工夫が求められている、そう思っています。これまでは信頼関係で成立していたものが、極端な話をすれば、コスパやタイパ重視という安易な選択に流されてしまふ、とでもいいいます。フジテレビやジャニーズの問題を

見ればわかるように、それまでは順調だったものが、ある閾値を超えた瞬間、一気に足元から崩れてしまうような事態に陥らないとは言えないのではないのでしょうか。だからこそ求められているのは、雪崩が起きる前の創意工夫、智慧なんだと私は思います。
森 きっと私たち僧侶の信仰心自体が問われているのではないかと、私は感じています。たとえば海外の方に、仏様をこう拝みなさい、と言ったとすれば、彼らはおそらく「なんで？」となります。「仏様を拝むと何をしてもらえるの？」という疑問が生じるのではないかと。そのとき、どう説明するのか、ということを考えなければいけないように思います。いろいろな説明方法があるかとは思いますが、僧侶自身が仏や神の子であり教えの代弁者であるという意識を持つことが大切かと思っています。僧侶自身が自分達の存在意義をもっと大切に、そうすることによって、本来の仏性といいますが、禅の本質的な部分を体現して伝えることができるのだと思います。

島津 私がこれまで経営者などを対象に12期開講してきた禅を修行一如で伝えるアカデミーの中で、どのような話をしているか、ということに触れさせていただきますが、その目的は禅を通じて「目覚める人

を作る、活かせる人を作る、伝える人を作る」ということなんです。ほとんどが経営者や企業の役員クラスが参加されているのですが、最終的には楽しんでやる境地が大切、ということ。好奇心や学ぶ楽しさを大切にしています。修行を終えたら最終的には里に下りる、里で、経営で、禅を活かさなければ意味がないと伝えています。仏教の歴史から始まり、茶道や能、武道など伝統文化の話。さらには科学的な効果や唯識まで学んでいただきます。最終的には日常に活かしてこそ禅なのだ。そのためにはまぎず坐ること、坐禅の、と。身心脱落に向けて、最低限の修業期間を全うすることを課しています。そもそも生きていくことだけで修業であり、皆大変なんだということ。そしてプラスαの加行。その後は自分だけではなく、開発といいますが、ほかの人にも得たものを伝えていくことが本当の始まりなんだということ。皆さん、最初はちんぷんかんぷんなんです。毎朝5時半から30分坐禅をし、その累計時間が50時間を超えたあたりから、明らかに皆雰囲気が変わってきます。100時間を超えた方などは目に見えた変化が容が起きます。切り口は人それぞれですから伝え方に違いはあると思いますが、経営者が変わることで、その下の社員たちにも浸透し、その会社の風土や業績にも変化が現れ

てきます。やっぱり上が変わらなければ下は変わりにくいと改めて感じました。ある女性社長、彼女は現在ブラジルに住なので、時差があるわけですがこちらが朝の5時であれば向こうは夕方5時。でも、彼女の時間のなかで、ZOOMで坐禅に参加し、ずっと禅の教えも学び続けている。それが良い結果へと結びついているわけで、こういうところに人の可能性というか、開花というか未来を感じていくわけです。もちろん、彼女に限らず、時間の都合で坐禅に來れないときがある方もいます。私自身、できない日だってあります。しばらく坐禅に來なくなつたなあと思つていたら、1年2年すると戻つて來られることも。私自身が毎期、改良を重ね、学び直しを続け、アウトプットし続けること、これがまた学びになるのです。この禅のアカデミーは実は私自身の修行、成長のためでもあるのです。

島津 私はアカデミーの総仕上げとして、また一般の方も対象にして、離島での、島での禅リトリートを主催しているので、四国に、こういう体験ができる場所ができてひとつの形を成せば、禅寺の形の次へのステップになる。そうすることで禅寺の、いや仏教の未来へと繋がっていく。大きな括りで話せば、日本全体が良くなりますし、それどころか地球が丸ごと豊かな世界へと変貌していくのかもしれないですね。
藤木 今日は長時間、お2人にはお時間をいただき、ありがとうございます。曹洞宗だけではなく、仏教の未来を考えたとき、どのような変化が必要なのか。とても難しい問題であり、乗り越えなければいけない障害は山ほどあります。でも、そのなかに「筋の光」ではありませんが、なにかヒントのようなものがお2人の話から得られた気がしています。



森香有 梅嶺院徒弟



島津清彦（しまづ きよひこ）

1965年東京都江東区生まれ。スタートアップ・ハウス代表取締役社長、ソニー不動産取締役を歴任し、東日本大震災での被災を機に独立起業。経営コンサルティング会社、シマーズを設立し、同年、得度し仏門入りしてからは多くの経営者、ビジネスリーダーに禅の教えを広める。その一方で全国仏教系大学学長会議などで講演、禅とビジネスに架け橋を架ける活動も行う。現在までに3社を起業。
(もり こうつう ばいおういん) 愛知専門尼僧堂で約1年半の修行。曹洞宗総合研究センター研修部、曹洞宗宗務庁、国際布教師として北米にある曹洞宗国際センターを経て、現在は愛媛県瑞應寺専門僧堂の役寮を勤める。高校の授業で触れた仏教の修行をしてみたくて僧侶となる。

編集後記

藤木隆宣

去る10月14日の連休明けに、知人の画家の展覧会を夫婦で観に行った時のことをご紹介いたします。展覧会場は山手線の日暮里駅に近いので、主催者の青島さんとは10時に駅で待ち合わせをしていました。午前9時代の山手線の外回り線はラッシュを過ぎていましたが、私たち夫婦は優先席に座っていました。ある駅から杖を着いて荷物をもったご婦人が乗ってこられました。そのご婦人の乗車するのも難しい、足元が危ない様子を見ていた30代の女性の方がいらっしゃったのですが、優先席にいた男性に「もしお体の具合が悪くないようでしたら、ご婦人に席をお譲りいただけませんか」と声をかけたのです。座っていた男性はすぐに席を立ち、ご婦人は席に座ることができました。この光景を見ていた私は、素晴らしいお声がけと勇気ある行動だな、と感心しました。今、日本に必要な心は30代の女

食の時には、五観の偈を意識した「お唱え」をしていたきます。その折に意識した「五観の偈」は次の通りです。

お米さん、やさいさん、お肉さん、お魚さん、そのいのちのおかげで生かされている、とうとういいのちいただきます

参加されたお母さんの中から「家でもお唱えしていますよ」という声が聞こえてくるようになってきたことは、喜ばしいことではないでしょうか。私は駒澤大学へ昭和38年に入學し、4年後の41年に卒業しました。その時代は都内に12、13ヶ所の日曜学園があり、私は中野区の保善寺日曜学園に所属していました。当時の園長先生は上村映雄先生でしたので、所属していた部員は多くの教訓を得ていたと思います。今となつては青春時代の懐かしい思い出ではありますが、お母さんたちにも私が得た教訓と似たものがあればいいな、と感じています。

時代は変わり、全国のご寺院が地域の事情に沿ってのご布教でいろいろ悩まれていると思います。

す。佐々木宏幹先生はいつも「ご僧侶にとって大切な視点とは、いかに民衆の中に生活仏教として生きているかを見極めることですよ」と仰っていました。仏事はご家庭にとって大事な行事になりますが、私も先生同様に生活仏教が育つ中味もたくさんあると考えています。

これからはその事がしっかり伝わらないと、残念ながら単なる通過儀礼になってしまい、いざ必要のない行事になる可能性があります。たとえばご法事が済んだ後、「修証義も難しいですよ」と言われたことが度々あるのです。このような意味から遅ればせながら曹洞宗のみならず各宗派の現代教学はどんどん進めていく必要があるのではないのでしょうか。

ところで島蘭、佐藤、高見先生の御尽力のもと『民俗宗教と仏教文化』が2026年2月に刊行になります。既刊の『宗教人類学の地平』『仏教人類学の諸相』と共に蔵書本としてお買い求めくださいますように切に御願

い申し上げます。

15

一仏両祖の教えを今に伝える
曹洞禅グラフ

2026 春号 - 176

対談

佐々木宏幹先生の教え
「生活仏教」に学ぶ

2026年2月10日 刊行

寄附者御芳名(敬称略)

令和7年7月29日～10月10日

〈児童養護施設〉手まり学園		
所在地	寺院名／個人名(回数)	金額
群馬県	祥雲寺	10,000
神奈川県	青木義次(141)	5,000
神奈川県	青木義次(142)	5,000
福井県	井元宣胤	10,000
埼玉県	吉祥院	10,000
合計額		40,000

仏教企画通信支援金		
所在地	寺院名／個人名(回数)	金額
福井県	妙徳寺(古坂龍宏)	4,000
合計額		4,000



ご支援をいただき
誠にありがとうございます



仏教企画発行の刊行物

『修証義』解説 ●丸山劫外=著	1,400円★
まんが問答一期一話 ●平和宏昭=文／垣内敬遠=まんが	1,200円★
葬送のしおり ●長井龍道=著	30円
〈修証義読本〉生老病死 ●須田道輝=著	500円★
曹洞宗檀信徒經典 ●須田道輝=解説	300円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉供養のすべて ●靈元文法=著	140円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉葬儀のすべて ●靈元文法=著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
観音の咒 大悲心陀羅尼 ●渡辺章悟=著	500円
宗教人類学の地平 ●佐々木宏幹=著	2,300円
仏教人類学の諸相 ●佐々木宏幹=著	2,300円

※ 価格はすべて税別価格です。(★印のものは部数により割引があります)
※ 『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

季刊誌 曹洞禅グラフ

【発行日／年4回】

彼岸-春号	2月10日
お盆-夏号	5月30日
彼岸-秋号	8月20日
正月-冬号	10月30日

【定価：200円／1部】

～9部	200円
10～19部	150円に割引
20～49部	135円に割引
50～99部	130円に割引
100～199部	120円に割引
200～299部	110円に割引
300～499部	100円に割引
500部～	90円に割引

お申し込み

有限会社 仏教企画

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel: 042-703-8641 Fax: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客様番号(コード)になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号 でも可能です。